

令和 6 年 9 月 12 日現在

機関番号：31603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10428

研究課題名(和文)成人移行期患者のヘルスリテラシー向上および自立促進を目的とした介入のあり方

研究課題名(英文)The way of the intervention for the purpose of health literacy improvement and the independence promotion of the adult shift period patient

研究代表者

古谷 佳由理 (FURUYA, Kayuri)

医療創生大学・国際看護学部・教授

研究者番号：90222877

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：成人後も受診を必要とする小児慢性疾患患者の「成人移行期支援」を推進するために、ヘルスリテラシーに焦点をあて、親子関係の要因を明らかにし、介入方法を検討することを目的として調査を実施した。中学生以上の小児慢性疾患患者のHLにおいて、特に伝達のHLが低く、親の批判的HLが子どもの伝達のHLにマイナスの影響を与えていた。小児慢性疾患患者の移行期支援において指摘されている、保護者や医療者に依存的な医療が反映されている結果だと考えられた。親と子の関係性を尊重しつつ、子どもの意思決定を積み重ねていける環境を医療者が整えていくことが必要であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では医療の進歩により劇的に生命予後が良くなった小児慢性疾患患者が、成長発達を遂げて大人として自立していく現代に生じているさまざまな問題に取り組む社会的意義がある研究であると考えられる。学術的意義として、小児慢性疾患を持ちながら成長発達をしていく子どもの自立を段階的に促進するために、本研究は従来的一方のみへの介入から親と子どもをペアとした相互作用の存在を前提にした視点から探求する取り組みであり、小児看護、家族看護に新たな知見を提示するという点があげられる。

研究成果の概要(英文)：In order to promote "adult transitional support" for pediatric chronically ill patients who need to see a doctor after adulthood, a study was conducted to identify factors in the parent-child relationship and to examine intervention methods, with a focus on health literacy. Transmissive HL was particularly low among HL of pediatric chronically ill patients of middle school age and older, and parents' critical HL had a negative impact on their children's transmissive HL. This was thought to be a result reflecting the dependent medical care on parents and health care providers that has been noted in transitional support for pediatric chronically ill patients. The results indicated that it is necessary for medical care providers to respect the relationship between parents and children and to create an environment in which children can accumulate decision-making skills.

研究分野：小児看護

キーワード：ヘルスリテラシー 小児慢性疾患患者 自立

1. 研究開始当初の背景

小児医療においては、成人移行期患者の自立支援が重要な課題のひとつであり、成人患者として自らが受ける医療を選択するための様々な能力を獲得することが必要である。中でも、健康情報を獲得して活用する能力、ヘルスリテラシー（Health Literacy：以下「HL」とする）の獲得は重要であり、これまでの申請者らの調査では、HL を高めることが患者の自立を促進する可能性が示唆されてきている。

本研究では、介入のあり方を検討する前段階として、HL は段階的に獲得されるものであるというコンセプトのもと、当事者と保護者を主体とした HL の向上および自立促進の方策を検討する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、成人移行期患者における HL の向上および自立促進であり、当事者と保護者を主体とした HL の向上および自立促進の方策を検討することである。

3. 研究の方法

【研究1：HL 調査内容が小学校高学年、中学生を対象として使用可能であることの検証】

申請者らが使用している HL の調査内容は高校生以上で使用していたため、同じ内容が小学校高学年、中学生に使用可能かどうか検討する必要がある。まず、健康な小学校高学年と中学生を対象に、申請者らが先行研究で使用した HL 調査内容、Manganello の概念を構成する「機能的」「伝達的」「批判的」「メディア」の4つの要素に基づいた内容の質問紙を用いプレテストを実施した。

【研究2：慢性疾患を持つ小学校高学年、中学生の HL のとらえ方と親のとらえ方の比較検討】

研究1の結果を受け、健康な子どもでは回答が困難であった表現を簡略化した質問紙の内容を検討し、小児慢性疾患をもち、定期的に外来通院をしている小中学生とその親を対象とした質問紙調査を実施した。調査内容は、移行準備状況チェックリストを参考に作成した質問項目、対象者の HL、対象者の属性である。対象者の HL は、HLS-14 を用いた。この尺度は、基本的な読み書き能力を指す「機能的 HL」5項目、情報を入手・伝達・適用する能力を指す「伝達的 HL」5項目、情報を批判的に吟味する能力を指す「批判的 HL」4項目から構成されている。5段階リッカート方式で回答を求め、得点が高いほど HL が高いことを表している。保護者に対しては、慢性疾患患者と同じ内容に「あなたの子どもは」という前置きをつけて問う形の質問内容とした。回収方法は、対象者の希望により、外来における回収ボックスへの投函回収もしくは郵送による回収とした。

分析方法は、記述統計、HLS-14 と関連する属性を検討するために差の検定および相関分析、また、親子の認識の相違を検討するために差の検定を行った。

【倫理的配慮】

研究への参加は自由意思であること、研究への不参加による不利益を被らないこと、結果は

個人が特定されない方法で取り扱われること、研究の全過程において個人情報の漏洩を防止するための方策をとっていること、質問紙の回答中に負担を感じたり答えたくなくなったりした場合には途中でやめてもよいことなどについて書面と口頭とで説明を行った。その上で、質問紙調査に賛同する際に回答を依頼した。質問紙の提出をもって研究の同意となることも併せて説明を行った。

研究は調査施設の倫理審査の承認を得て研究を実施した。

4. 研究成果

【研究1】

前年度まで実施していた、「小児慢性疾患患者における成人移行期支援のためのヘルスリテラシー尺度の開発」で明らかとされた子どもの自立を促進するための介入のあり方を検討するために、段階的に支援を行っている施設へのヒアリングを行った。実践までの道のりやチームを作るために取り組んだプロセス、実践前後での子どもや親、また医療関係者の考えや思い、状況を把握することができた。

ヘルスリテラシーを測定する内容として「機能的」「伝達的」「批判的」の要素についてはほぼ決定することができた。「メディアリテラシー」に関しては、新しい概念であることもあり、測定内容を検討した。メディアリテラシーを測定する内容を組み立て、質問内容の妥当性を検討することを目的として、健康な小学生を対象としてプレテストを実施した。その結果、「内容が理解できない」「経験がないから想像ができない」といった、内容の理解や回答のしづらさが明らかとなった。使用した質問内容は、現状のヘルスリテラシーを問う尺度を用いたものであり、受診経験や病気体験をもとに問われているものであった。内容を簡易な表現に変え、具体的な内容を加え、再度対面調査でプレテストを行ったものの、発達段階に応じた理解ができる内容に到達できず、年齢に合った内容妥当性が得られなかった。研究者間で検討を繰り返した結果、健康小児を対象とした内容にそぐわないという結論に達した。

【研究2】

A県の2施設の小児科外来に通院する10歳以上の慢性疾患患者とその保護者を対象として、質問紙を説明とともに手渡し、質問紙調査を依頼した。子どもとその親206名に質問紙を配布し、186名から回答を得た（回収率90%）。

(1)『小児慢性疾患患者のヘルスリテラシーの実態』では、以下のことが示された。

中学生以上の小児慢性疾患患者のHLにおいて、特に伝達的HLが低く、小児慢性疾患患者の移行期支援において指摘されている、保護者や医療者に依存的な医療が反映されている結果だと考えられた。患者自身が、医療者や周囲の人に意見を伝えられる機会を設け、獲得した情報を理解し、生活上に取り入れていくという過程を支援していくことが必要であると示唆されている。

(2)『慢性疾患を有する子どもの成人移行期支援—親による支援の実態調査—』では、以下のことが示されている。

10歳から19歳の小児慢性疾患患者の保護者179人のうち約60%の保護者が、子どもの病

気と治療について子どもと一緒に話し合っており、子どもたちが小児科から成人科に移るときがいずれ来るだろうと、移行を受け入れていた。保護者による成人移行支援実施率は全般的に低いものの、子どもの年齢と保護者による支援の実施には正の相関があり、子どもの年齢とともに支援が進んでいるという強みも見出されている。一方、移行に導けるような情報収集や、子ども一人で外来診療をさせることなどの支援を実施できている親は 20%未満であった。さらに、「子どもに自分の病状や治療上の健康状態を記録することの勧め」「経済的支援に関する情報収集」「子どもが成人した後の公的支援や医療保険の利用」などは、がんや血液疾患を持つ子どもの親よりも糖尿病や心血管疾患を持つ子どもの親の方が積極的に実施しているという、疾患による差異も明らかとなった。

(3)『血液疾患を有する成人期移行期の小児におけるヘルスリテラシーの自己評価と親による評価の比較』では、中学生から 19 歳の 64 組の親子の結果を分析し以下のことが示された。

親の批判的 HL が子どもの伝達的 HL にマイナスの影響を与える以外は、親の HL は子どもの HL に影響を与えなかった。この結果は『小児慢性疾患患者のヘルスリテラシーの実態』の研究結果と同様であり、伝達的 HL を低くする要因が親のかかわりであることが支持された。また、ヘルスリテラシーを向上させるためには、意思決定の積み重ねによって良し悪しを判断し、自分らしい価値観を育てていくことが大切だといわれており、周囲の大人たちが先回りをしすぎず、子どもを向き合い子どもの意思決定を尊重していくかかわりが必要である。さらに、子どもの HL 自己評価と親の HL 評価の間に不一致が見られたため、今後、親のこの不一致が子どもの自立に与える影響について検討することで、当事者と保護者を主体とした HL の向上および自立促進の方策に繋げることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Ozawa Noriko, Shibayama Taiga, Hiraga Noriko, Fukushima Hiriko, Suzuki Ryoko, Furuya Kayuri	4. 巻 69
2. 論文標題 Parental readiness for the transition to adulthood of children with a chronic disease	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Pediatric Nursing	6. 最初と最後の頁 56～61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.pedn.2022.12.024	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平賀紀子、小澤典子、古谷佳由理
2. 発表標題 慢性疾患を有する子どもの成人移行期支援 - 親による支援の実態調査 -
3. 学会等名 第32回日本小児看護学会学術集会（福岡）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小澤典子、平賀紀子、古谷佳由理
2. 発表標題 小児慢性疾患患者のヘルスリテラシーの実態
3. 学会等名 第68回日本小児保健学術集会（大阪）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 新井響子、小澤典子、古谷佳由理、門間貴史、武田文
2. 発表標題 思春期の慢性疾患患者の疾病管理状況と首尾一貫感覚（SOC）の関連
3. 学会等名 第80回日本公衆衛生学会総会（東京）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小澤 典子 (OZAWA Noroko) (20821408)	慶應義塾大学・看護医療学部(信濃町)・講師 (32612)	
研究分担者	平賀 紀子 (HIRAGA Noriko) (40827581)	茨城県立こども病院(小児医療・がん研究センター)・小児医療研究部門・研究員 (82122)	
研究分担者	福島 敬 (FUKUSHIMA Takashi) (30323299)	埼玉医科大学・医学部・准教授 (32409)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------